奥山に猫またといふものありて

（第八十九段）

要旨

人間を食うという猫またの噂を聞いた法師が、猫またを恐れながら夜道を歩いていた。その法師に猫またが飛びついた。法師は慌てて小川に落ち入り、助けを求めた。近所の人たちに助けられ、はうようにして家に入った。実は、法師の飼い犬が主人を知って、飛びついたのであった。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め〜P三五・3〈入りにけり。〉	奥山や、この辺りにも、人を食う猫またがいるという噂を連歌を仕事としている法師が聞いた。用心しなければと思っていた頃、夜更けにひとりで帰ったが、小川のほとりで猫またが寄ってきて、飛びついた。慌てて小川に落ち、連歌の賞品も水に浸かり、法師ははうようにして、家に入った。
第二	P三五・4〈飼ひける犬の〉〜終わり	飼っていた犬が、暗いのに飼い主の帰宅を知って、飛びついたということだ。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①「奥山（おくやま）　に　猫（ねこ）　また　と　いふ　もの　あり　て、　人（ひと）　を
格助・場所　格助・引用　八四・体　ラ変・用　接助・単接　格助・対象

食ら（く）ふ　なる。」　と　人（ひと）　の　言ひ（いひ）　ける　に、　「山（やま）　なら　ね
八四・終　伝・体　格助・引用　格助・主格　八四・用　過・体　接助・単接　断・未　打・已

ども、　これら　に　も、　猫（ねこ）　の　経上（へあ）がり　て、　猫また　に
接助・逆確　代　格助・場所　係助・同類　格助・主格　ラ四・用　接助・単接　格助・変化

なり　て、　人（ひと）　取る（とる）　こと　は　あ　なる　ものを。」　と
ラ四・用　接助・単接　ラ四・体　係助・提示　ラ変・体（撥音（無表記））　伝・体　終助・詠嘆　格助・引用

言ふ（いふ）　者（もの）　あり　ける　を、　何阿弥陀仏（なにあみだぶつ）　と　か　や、　連歌（れんが）　し
八四・体　ラ変・用　過・体　格助・対象　格助・引用　係助・疑問　間助・詠嘆　サ変・用

ける　法師（ほふし）　の、　行願寺（ぎやうぐわんじ）　の　ほとり　に　あり　ける　が　聞き（き）
過・体　格助・同格　格助・体修　格助・場所　ラ変・用　過・体　格助・主格　カ四・用

て、　ひとり　ありかん　身　は、　心す（こころす）　べき　こと　に　こそ　と
接助・単接　副　カ四・未　婉・体　係助・提示　サ変・終　当・体　断・用　係助・強意　格助・引用

思ひ（おも）　ける　ころ　しも、　ある　所（ところ）　にて　夜（よ）　更く（ふく）る　まで　連歌（れんが）　し
八四・用　過・体　副助・強意　連　格助・場所　カ下二・体　副助・範囲　サ変・用

て、　ただ　ひとり　帰り（かへり）　ける　に、　小川（こがは）　の　はた　にて、　音（おと）
接助・単接　副　副　ラ四・用　過・体　格助・時間　格助・体修　格助・場所

に　聞き（き）　し　猫（ねこ）また、　あやまた　ず　足（あし）もと　へ　ふと　寄り来（よりき）
格助・状態　カ四・用　過・体　タ四・未　打・用　格助・方向　副　カ変・用

て、　やがて　かきつく　まま　に、　首（くび）　の　ほど　を　食（く）はん
接助・単接　副　カ四・体　格助・時間　格助・体修　格助・対象　八四・未　意・終

①「奥山に猫またというものがいて、人を食うそうだ。」とある人が言ったところ、「山ではなくても、この辺りにも、猫が年を経て変化して、猫またになって、人（の命）を取ることがあるそうだな。」と言う者がいたのを、なんとか阿弥陀仏とかいう、連歌を詠むことを仕事としていた法師で、行願寺の辺りに（住んで）いたのが聞いて、（自分のような）ひとり歩きをするような者は、気をつけなければならないことだと思っていたちょうどその頃、ある所で夜遅くまで連歌をして、ただひとりで帰ってきたときに、小川のほとりで、噂に聞いた猫またが、狙いを外さず（法師の）足もとにすっと近寄って来て、すぐに飛びつくと同時に、首の辺りを食おうとする。

と　す。　②胆心も　失せ　て、　防がん　と　する　に、
格助・引用　サ変・終　係助・強意　サ下二・用　接助・単接　ガ四・未　意・終　格助・引用　サ変・体　接助・逆確
力も　なく、　足も　立た　ず、　小川　へ　転び入り　て、
係助・列挙　形ク・用　係助・列挙　タ四・未　打・用　格助・方向　ラ四・用　接助・単接
「助けよ　や、　猫また　よ　や、　よ　や。」　と　叫べ　ば、　こ
カ下二・命　間助・呼掛　間助・呼掛　間助・呼掛　間助・呼掛　間助・呼掛　格助・引用　バ四・已　接助・順偶　代
家々　より　松ども　ともし　て　走り寄り　て　見れ　ば、
格助・起点　サ四・用　接助・単接　ラ四・用　接助・単接　マ上一・已　接助・順偶
の　わたり　に　見知れ　る　僧　なり。　③「これ　は　いかに。」
格助・連体　格助・場所　ラ四・已　存・体　断・終　代　係助・提示　副
と　て、　川　の　中　より　抱き起こし　たれ　ば、　連歌　の　賭け
格助・引用　格助・体修　格助・起点　サ四・用　完・已　接助・順偶　格助・体修
物　取り　て、　扇、小箱　など　懐　に　持ち　たり　ける　も、　水
ラ四・用　接助・単接　副助・例示　格助・場所　タ四・用　存・用　過・体　係助・同類
に　入り　ぬ。　④希有に　して　助かり　たる　さま　にて、　はふはふ
格助・場所　ラ四・用　完・終　形動ナリ・用　接助・単接　ラ四・用　完・体　格助・状態　副
家　に　入り　に　けり。
格助・場所　ラ四・用　完・用　過・終
⑤飼ひ　ける　犬　の、　暗けれ　ど　主　を　知り　て、
八四・用　過・体　格助・主格　形ク・已　接助・逆接　格助・対象　ラ四・用　接助・単接
飛びつき　たり　ける　と　ぞ。
カ四・用　完・用　過・体　格助・引用　係助・強意（略）

②（法師は）正気を失って、防ごうと思うが、力も出ず、足も立たず、小川に転げ落ちて、「助けてくれよ、猫また、ただ、猫またぞ。」と叫ぶと、（近くの）家々からたいまつをともして（人々が）走り寄って来て見てみると、この辺りで（顔を）見知っている僧である。③「これはどうしたことか。」と言って、川の中から抱き起こしたところ、連歌の会での賞品を得て、（その）扇や、小箱など懐に持っていたものも、（川の）水の中に入ってしまった。④九死に一生を得て助かったという様子で、はうようにして家に入っていった。

⑤（実は、法師の）飼っていた犬が、暗かったのに主人（が帰って来たの）を分かって、飛びついたのだったということだ。

学習活動のポイント

学習活動のポイント

❶ 古語の意味・用法、文法事項に注意して現代語訳する。[知技(1)ウ・(2)ウエ]　→「言葉と表現」1

❷「猫また」のうわさを聞いて、法師はどのように思ったかを読み取る。[知技(1)エ][思判表B(1)ア]　→「学習のポイント」1

❸「猫また」が現れた後の、法師の様子と行動をまとめる。[思判表B(1)イ]　→「学習のポイント」2

❹ 最後の一文の表現上の効果を考える。[知技(1)ア][思判表B(1)ウ]　→「言葉と表現」2

❺ 作者が法師をどのような人物として描こうとしているか、考える。[知技(2)イ][思判表B(1)オ][主態]　→「言語活動」1

❶助動詞の意味を考えながら、正確な現代語訳を心がける。

【評価】 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、自然な表現で現代語訳ができているかにより、確認する。

展開

・時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、確認する。

❷「思ひけるころしも」の部分を手掛かりに思っていたことを簡潔にまとめさせる。わかりやすい展開なので口頭でまとめさせてみる。学校の事情によってはノートにまとめさせてもよい。

【評価】 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、確認する。

・文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、口頭やノートにまとめさせて、確認する。

❸まず、場面に分ける。場面は次のように分けることができる。

・猫またの噂を耳にした場面
・夜更けに何かに飛びつかれた場面
・助けを求めた場面
・家に戻った場面

それぞれの場面での心情を本文に即して読み取ったり、想像したりしておくと、次の作業の際に役立つ。

【評価】 法師の様子と行動について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、口頭やノートにまとめさせて、確認する。

❹この話は「おち」のある面白い話である。その面白さをノートなどにまとめさせておく。その上で、それを効果的に語るために事実を最後まで伏せている構成の巧みさに気付かせる。似たような経験を出し合ったり、各自の考えに対して、どのように思うかなどを話し合わせるところまでいけるとよい。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・構成の巧みさと先入観の恐ろしさについて評価しているか、話し合いにより、確認する。

❺まず、当時の法師の理想像と現実とを調べさせる。その上で、ここに登場する主人公を当てはめて考えさせる。内容自体はさほど難しくないので、この段階で、生徒に興味を持たせることを主眼とし、生徒の意見が活発に出るようであれば、授業の成果と考えてよい。

【評価】古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、調べ学習により確認する。

・作者の描いた法師像について、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めているか、話し合いにより確認する。

・進んで「徒然草」に表れた作者のものの見方、感じ方を捉え、文語助動詞の種類と用法を理解し、学習課題に沿って、本文の描写を手がかりに作者の描く法師像について、積極的に話し合おうとしているか、分析する。

《板書例》「猫また」出現後の法師

・胆心も失せて
・力もなく、足も立たず
・小川へ転び入りて
　⇐（抱き起す）
・扇、小箱など…水に入りぬ
・希有にして助かりたるさまにて
・はふはふ家に入りにけり

指導上の注意点

●三四ページ

問 **「これら」（3行目）とは、何を指すか。**

答 この辺り。京都の町中を指す。

補 「奥山」に対応している。現代語では「これら」という言い方で場所を指すことはないが、古語では場所を指す近称の指示語ともなる。

問 **「ありけるを」（4行目）は、どこに続いているのか。**

答 聞きて

補 「ありけるを」が「聞きて」の目的格になっている。

問 **「連歌しける法師の」（4行目）の「の」の意味・用法を答えなさい。**

答 同格。「で」と現代語訳する。

補 「連歌しける法師」と「行願寺のほとりにありける（法師）」が同一人物を指している。

問 **◉「聞きて」（5行目）とあるが、どのようなことを聞いたのか。**

答 山ではなくこの近くでも、猫が年を経て変化して猫またになり、人の命を取るということがあるらしいということ。

補 係り受けを正確につかんで、「山ならねども…あなるものを。」が根拠となる部分であることを理解する。

語句の研究

●三四ページ

2猫また　伝説に描かれた動物。藤原定家の「明月記」天福元（一二三三）年の条に、目は猫のようで、体長は犬ほどの猫またが人を殺したとある。

2食らふなる　「なる」は伝聞の助動詞の連体形。「…だそうだ、…という噂だ」。連体止めで余情表現になっている。下文の「あなる」の「なる」も同じ。

2これらにも　このあたり、こちら側の意。京都の町中のこと。

2山ならねども　ここでは「ども」は逆接の確定条件を表す。「山ではないけれども」。

3経上がりて　年をとって変化して。昇進することの意味もあるが、ここでは猫が年を経て猫またに成り上がったことを指す。

3人取ること　「取る」は「命を取る、殺す」の意。

3あなるものを　「あなる」は「ある」の音便形「あん」に「なる」の接続した形で、撥音便の「ん」が表記されなかったもの。終助詞「ものを」は感動・詠嘆を表すが、ここでは「…（という話）なのに（知らないのか）」くらいの意。

4何阿弥陀仏　阿弥陀仏号という一種の法号で、「空阿弥陀仏」「明阿弥陀仏」などといったものの先頭の部分をぼかした言い方。後世の「観阿弥」「世阿弥」もその類。「某阿」号は連歌を嗜む者もよく用いた。

4とかや　下に「言ふ」「言ひて」が省略されている。

4連歌しける法師の　「法師」とあるが、僧侶ではなく、在俗のまま仏教に帰依した者（在家の沙弥）、在家僧か。生活の足しとして、半職業的に連歌の指導などを行っていたのであろう。後に続く文章からも分かるように、賭け連歌なども頻繁に行っていた。「の」は同格を表し、「で」と訳す。

5行願寺　寛弘元（一〇〇四）年、一条天皇の時行円上人によって開かれた天台宗の寺。当時、一条の北、油小路の東、京都市上京区にあった。現在は京都市中京区寺町通り竹屋町に移っている。行円上人は革衣を好んで着用していたため、革聖、革上人とも呼ばれ、この寺の本堂を俗に「革堂」と言う。

5ひとりありかん身は　「ひとり歩きをするような者は」。「身」は法師自身のことを言っている。

問「音に聞きし猫また」（8行目）は、どの部分を受けているか。

答「奥山に…」「山ならねども…」の冒頭の二つの噂話を受けている。

補「音に聞く」は「噂に聞く」という意の慣用句。この段は噂話を法師が耳にして、恐怖に感じるところから始まっている。

問「あやまたず」（8行目）「ふと寄り来て」「やがてかきつくままに」（9行目）という猫またの描写から、そのときの法師の心情を想像してみよう。

答噂に聞いて恐れていた猫またが自分を狙って、飛びついてきたと思い、強い恐怖感にとらわれていた。

補法師は猫まただと信じているから、自分の命を狙って、近寄って来たと思い、猫またの動作を必要以上に素早く感じている。最後に明かされるが、飼い犬がまっしぐらに主人に飛びついてくるのだから、素早くて当然である。

●三五ページ

問「連歌の賭け物取りて、…水に入りぬ。」（1行目）の部分からは法師のどのような面がうかがわれるか。

答法師と呼ばれてはいるが、連歌の賭け物として、日用品をたくさん持ち帰るような俗な面を持っている。

5心すべきことにこそ　「心す」はサ変動詞で、「注意する、気をつける」の意。「べき」は当然を表す助動詞。係助詞「こそ」の下には、「あれ」が省略されている。

6ころしも　「ちょうどその頃」。「しも」は副助詞で、強意を表す。副助詞「し」に係助詞「も」が付いたものと考える説もある。

7小川　行願寺の辺りを流れ、堀川に注ぐ川の名。固有名詞である。

8音に聞きし　「音に聞く」は「噂に聞く」という意の慣用句。「し」が用いられていることから、冒頭の作者が直接聞いた噂が踏まえられていることが分かる。

8あやまたず　「狙いを外さず、間違いなく」。「まっしぐらに」と考える説もある。下文の「ふと」も素早い動作を表している語で、何かに襲われたと思った法師が猫またに違いないと思い込んだことから生じた判断によった表現と考えられる。

9やがてかきつくままに　「やがて」は「すぐに、そのまま」。「かきつく」は「取りつく、飛びつく」。「ままに」は「すると同時に」の意。このあたりも猫またの素早い動作を表していると共に、法師に考える余裕を与えないことを示している。

10胆心も失せて　「胆」には「心、思慮」の意があり、「胆心」も「心」に同じ。「胆心うす」で「正気を失う」の意の慣用句である。「肝を潰す」。

12助けよや、猫またよや、よや　文法的説明、現代語訳共に諸説あるところである。「助けよや」を動詞の命令形「助けよ」に呼びかけの間投助詞「や」の付いたものとした。また、「猫また」に付いている「よやよや」の「よ」も呼びかけの間投助詞で「よ」「や」が重ねて用いられているとした。「助けてくれよ、猫まただぞ。」と近くの人に助けを求めているのである。①「助けよや、猫またよや」の反復、②「助けよや」の反復、③「猫またよや」の反復などの説があるが意味としてはいずれの説を採っても同じようなものになると考えてよいであろう。

13松ども　「松」は「たいまつ」のこと。「ども」は複数を表す接尾語。何人かの近くの人が助けに出てきたのであろう。

14見知れる僧　「見知る」は「顔見知りである、交際がある」。「見知れる」の「る」は存続の助動詞「り」の連体形。「僧」は「連歌しける法師」の「法師」と同一人物。法師の家のすぐそばまで帰って来ていたこ

補 連歌をするということに始まり、犬を飼うことなども俗なことなのであろう。そのような俗な面が猫またの噂におびえるという心理状態を作り上げてもいるのだろう。

問 **「飼ひける犬の…」（4行目）以下の最後の文はどのような効果を上げているか。**

答 猫またの正体を明かしている。また、区切れを短くして、それまでの話に感情移入していたような感じとは異なり、突き放したような感じがある。

補 感じ方はそれぞれあるだろうが、最後の一文の持つ、冷静な感じは味わいたい。明かされてみれば、猫またについての全ての行動が納得のいくものであることが分かる。とが分かる。

●三五ページ

1こはいかに　「これはどうしたことか」。下に「しつることぞ」などを補う。

1連歌の賭け物取りて　「賭け物」は勝負事に賭けられ、勝者に与えられる賞品。ここは連歌の席で、秀逸な句を作ったので与えられた物であろう。「取る」は「得る、獲得する」の意。

2希有にして　「希有に」は形容動詞「希有なり」の連用形。「珍しく、不思議なことに」の意であるが、ここでは状況を踏まえ、「九死に一生を得た」とする。「して」は上の「希有に」を強めている。

3はふはふ　「這ふ」を重ねて、強めた言い方。慌てて逃げる様子を表している。

4飼ひける犬の　法師が飼っていた犬である。「の」は主格を表し、「飛びつき」に続く。

4主　「飼い主」のこと。法師を指す。

4飛びつきたりけるとぞ　下に「言ふ」「聞く」などの結びが省略されている、慣用的な言い方。説話などに多く用いられる。

鑑賞

この段では、まず、ある事件のことが語られる。部分部分に古文特有の表現はあるものの、全体的には平易な語り口である。展開もスピーディーなので、じっくり読むと、事件について、だいたいのところは読み取ることができるであろう。その際に、押さえておきたいのが、冒頭に語られる噂話の部分である。いつの世でも噂話が好きなことは変わらない。特にそれが根も葉もないことだと、余計におもしろがって尾鰭が付く。ここも、確かなことは分からないが、噂が噂を呼んでいるというふうに読み取れる。ところが、この法師はそれを単なる噂として聞き流すことはしない。噂を信じ切って、恐怖心を自分の心に植え付けるのである。ここにいわゆる先入観というものが出来上がる。「この近くにも猫またという怪物が現れる」「猫またに襲われると命を落としてしまう」といった考えが法師の頭の中に忍び込む。この後は、その先入観にしたがって、全ての物事が法師の中で処理されていく。何かが近寄ってくる気配がすれば、それは猫またに違いないし、必ず食い付かれて命を落とすに違いないと思うのである。そのような心情に支配されてしまうと人間、何もできなくなるということが、「胆心も失せて」「力もなく」「足も立たず」などの表現からうかがわれる。このあたりも法師の心情をうまく踏まえながら、たたみかけるように話を展開させていく書きぶりは見事と言うほかない。猫またの描写から、法師の様子の描写はこの段の読みどころである。「助けよや、猫またよや、よや。」という法師の助けを乞う叫びも、混乱の中で出した叫び声らしく響いてくる。法師自身、何と言っているか、まともには分からなかったのではないだろうか。「希有にして助かりたるさまにて」と法師は最後まで猫またに襲われたことを疑ってはいない。おそらく、助けに出てきた人々のたいまつの明かりによって、猫またが何であるのかが分かったはずなのに、法師の目にはそれが正しく見えないのである。この段は「滑稽な話」と言われている。しかし、このように読んでみると、この法師を笑ってばかりはいられないという気にもなってくる。先入観にとらわれて、正しく物事が見られないことは、我々にだって決して少なくはない。法師を笑い飛ばす一方で、冷静に我が身を振り返ることも必要だろう。このような視点こそが「徒然草」の大きな特徴なのである。多少お説教くさいのは仕方がないが、これほど分かりやすい例で、誰にでもある間違いを説くのはやさしいことではない。そして、今回の教訓は、最後の一文で種明かしをするという構成によって、ぐっと引き立っている。何の感情もこもっていないような口振りで、事実だけを簡潔に記す。だからこそ余計に印象が強く、話をその事実をもとに振り返ったとき、改めて「なるほど」と思わされる表現に数多く出会うことになる。このような「滑稽な話」は「徒然草」には幾つもある。これに限らず、幾つかを紹介することがあってもよいだろう。高校時代は「何を言っているのだか」と肯定的に受け取ることができないような話でも、いつか、ふとした機会に「そういえば、高校時代に似たような話を読んだ気がする」と懐かしく思うこともあるだろう。分かりやすく、印象に残る話はこの時点での古文学習には最適なものだと思われるのである。